

# 建築会会報 第22号

芝浦工業大学

発行  
東京都江東区豊洲3-7-5  
芝浦工業大学建築会  
2006.12.12

## 建築会会報 第22号 目次



芝浦工業大学 豊洲キャンパス 完成予想図

技術と社会交流を大切に 建築会会長 石井敏明

芝浦工大建築学科に着任して 教授 堀越英嗣

教育・研究に関する抱負 教授 南一誠

「病院にて」 助教授 西村直也

新校舎レポート

新校舎に移って 角田麻夫（大学院修士2年）

「生きがい」 村上健（1963年卒）

デザインすることということ 岩村拓朗（1983年卒）

発掘現場にて 金丸義一（1687年卒）

設計を自分の仕事としたい方へ 吉浦一郎（1988年卒）

影のデザイン 佐田野剛（1988年卒）

地球の裏側での建築 小林良治（1993年卒）

転機 丸尾（旧姓：西田）小真希（1998年卒）

A R C H I F E S T A 原嶋宏樹（1996年卒）

建築学科の動きと近況 建築学科 林正司

特別講演会報告 常任幹事 井家常雄・染谷清

# 芝浦工業大学 建築会会報 第22号

発行  
東京都江東区豊洲3-7-5  
芝浦工業大学建築会



## 技術と社会交流を大切に 建築会会長 石井敏明

昨年の建築会総会は豊洲新キャンパスの見学から始まり晴海バサラでの理事長、学長をお迎えしての懇親会へ移り会員約百名の出席のもと開催し交流を深めることが出来ました。

出席者は専門学校1949年卒の大先輩から2000年卒業生までと大学の歴史そのものでした。新キャンパスの説明及び案内は設計を担当した卒業生が行い、我々が学んだ田町校舎との違いや新入生にとり伸び伸びと学べる環境が与えられたと実感しました。

懇親会では平田学長の新たな時代への大学教育についての深く強い姿勢が伺え、新任先生の紹介では若く意欲的な学生をリードしていける人材が就任されたのではと大いに期待されます。

建築会も若い常任幹事が増え若いスタッフが中心に活動しております。情報化社会でもありホームページは欠かせなくなりましたが利用者も年々増加しており、事務局の努力の賜物が「建築会」エンターでトップにランクされておりますのでお試しください。

建築会の行事から卒業生の社会活動の様子、大学関係から建築会との接点、同期会の案内等多種多様に利用されておりますので週に一度は覗いてください。

昨年暮れから今年にかけ耐震強度偽装で大きな社会問題となりましたが、総会前の出来事で一瞬ひやりとしました。このような問題発生の原因の一つとして、社会との接点が限定されており社会性に欠けていたのではと思います。ことの重大さの認識のなさには驚かされ、何か対応方法といっても誰も具体的な提案はないと感じました。

在学生対象の卒業生による特別講演会は回を重ねておりますが就職の目的は当然として学生時代に社会勉強の必要性を感じられるようになればと思っております。講演会は我々卒業生にとっても大変参考になりますのでご出席をお勧めいたします。見聞を広めることと交流のチャンスにもなります。知識の豊富な人たちが集まるとそこからいろいろな情報を元にアイデアが生まれ大きなものを生み出すのは当然で楽しいものです。そのようなOB交流の機会を増やして行きたいと考えております。

建築会の行事を通し大学との接点が増え、建友会、校友会との交流も深まりつつあります。これから社会の中心となる若い人達が建築会を支えてくれることにはなりますが、団塊の世代であるOBにその経験と知識を活かし建築会と若い世代の後押しを切にお願いいたします。

(1965年卒 株式会社 総合建築設計)

## 芝浦工大建築学科に着任して 教授 堀越英嗣

私にとって、着任時に歴史ある田町の校舎に通うことができたこと、また、長年教壇に立たれていた先輩教員の皆さんと短い期間でしたが同じ時期を過ごせたことは大変貴重な経験でした。個性あふれる先生方と、明るく伸びやかな学生たちが、古いけれども大変わいのある空間で教員と緊密に過ごす様子こそ「芝浦工大建築学科らしさ」といえると、肌で感じることができました。しかしながら、この「らしさ」を新しい豊洲の空間でこれからどのように継承し、新たな芝浦工大建築学科をつくっていかなければならないかを考えるにつれ、責任の大きさを感じております。

私にとって、とても素晴らしいことは、今の学生たちが持っている前向きで積極的な雰囲気です。先輩から綿々とつながることで生まれてくるこのような雰囲気は簡単には作り出せるものではなく、伝統の大切さを感じた次第です。このような学生と、課題やゼミにおいて、様々なことを一緒に考えることで新たな問題解決への筋道を見つけ出すような教育を続けてゆきたいと考えています。現在私が特に大切にしている授業は一年生の最初の授業の「建築の形態と空間」です。この授業はいわば新入生のための建築の概論でもあるのですが、様々な可能性を持つ新入生たちが建築と自分との接点を見いだすことができるように、また実感を持って学んでいけるように工夫をしております。

建築学科の先生方は大変教育熱心で、様々な場面で学生の立場に立った改革案や解決策を（少々長くなりがちではありますが）熱心に学科会議で話し合われる姿は当初、大変印象的でした。近年、120人前後の新入生が毎年入学してくるのですが、彼ら自身、初めのうちは大人数の授業に戸惑いながらも、次第に集中してくる様子が伝わってきます。90分間集中が途切れることなく集中する姿に、将来の可能性を大いに感じます。このような優秀な学生たちのモチベーションをいかに高めながら卒業まで導いてゆくのかを常に念頭に置き、これからの教育活動を続けてゆきたいと思っております。



# 教育・研究に関する抱負 教授 南 一誠

芝浦工業大学に勤務するようになって1年半が経過しました。この間、私がどのような考えを持って教育、研究に従事してきたかをご報告したいと思います。

(1)ものづくりとしての「建築」が、「技術」や「社会」とどのような関係にあるのかを実践的に学ぶ。

建築学は「人間を取り巻く環境」や「社会」と密接不可分な専門領域です。21世紀の建築分野が取り組むべき課題は広範で、地球環境問題（資源・エネルギー、廃棄物処理）、少子高齢化（ユニバーサルデザイン）、産業構造の転換、市民の計画、意思決定プロセスへの参加、情報化の進展といった社会全体の課題に、積極的に取り組んでいく必要があります。基礎教育の段階から、建築を成立させる複雑多岐な社会的、経済的、文化的背景あるいは技術的背景について、学生の皆様に理解をしていただくよう配慮しています。

(2)コミュニケーション能力、表現能力の涵養。

建築の実務は必ずと言ってよいほどチームワークで行われ、多くの利害関係者との調整を経て実現します。実務において「設計」とは、「コミュニケーション」であり、「合意形成のプロセス」であるとも言えます。今日、建築分野の教育は、正しい解がただひとつ存在しそれを学修すればよいという状況ではなく、個々の状況に最適な個別解を関係者の多様な価値観の調整において見出すプロセスの習得に力点が置かれています。学生達は社会や建築主などの要求条件を理解し、自分の考えを相手が理解できる形で伝達する能力、上司、仲間、部下と議論を行いチームとしてよりよい計画案を導出する能力、他分野の専門家と協同、連携する能力を向上させる必要があります。そのため学修の各場面でグループによるディスカッションを行う機会をできるだけ多く持ちたいと考えています。

(3)個々の学生の関心、個性、適性に応じた、多様な教育の機会・内容・方法の提供。

大学、大学院レベルの教育は担当教官の研究や社会貢献活動と関係を持つことで、第一線の研究に触れる機会が増え、より実践的、応用的になって行きます。私自身は建築・都市環境を時間的展開の中で捉え、空間・形態の変容プロセス（transformation）を分析することで、計画・設計手法として一般化する原則を見出すことに関心をもっています。このテーマは私が若いころMITのハブラケン教授のもとで学んだものです。その研究経験や、これまで私が行ってきた公共建築の設計経験などを活かして、一人ひとりの学生の興味や個性を尊重して、教育・研究に携わって行きたいと考えています。建築会の皆様には今後、お世話になることが多いと存じます。どうぞよろしくお願いたします。

## 芝浦工業大学 建築学会 会報 第22号

発行

東京都江東区豊洲3-7-5

芝浦工業大学建築会



# 「病院にて」 助教授 西村直也

最近病院へ足を運ぶことが多い。何も病気を患っているのではなく、環境測定という事で病院の待合室や病室にお邪魔している訳である。環境計測というのも、最初に計測機器をセットしてしまえば後は機械まかせであり、関係者へのヒアリングも終わるとその後は正直に言ってやる事が無い。これをよいことに、病院の中を見て廻る事が多いのである。

各地の病院を廻っていつも感じる事だが、最近の病院は実に明るくてキレイである。居心地が良いというか、快適なのである。一昔前は病院とは薄暗くて陰気臭く、建物としてのイメージは決して良いものではなかったが、随分と改善されたものである。全くもって喜ばしい限りである。そして、もう一点感じる事が、この国には老人がいかに多いかという事である。

入院患者中心の大病院での測定が多い事、そもそも健康な方々は来ないので、サンプルの取り方として偏っている事は十分承知の上である。その分を差し引いても日本は高齢者医療負担が膨大である事を実感させられる瞬間である。

更に頭をよぎることがある。若い人達の事である。若年に関しては、その人口比が年々減少している事は誰もが知っている事である。しかし、質的变化は、ともすればその取り上げられ方が感情的に過ぎる嫌いがある。「現代の若者は～」など。

資源小国である日本は明治維新以降、富国強兵の名の下に世界で最も教育熱心な国であった。維新以前も、寺子屋に代表される教育制度が充実しており、それが発展の基礎となった事もまた周知の事である。時として誤った選択があったにしても、教育は日本にとって生命線である。そして、現在でも教育熱心である事は日本人の民族的特徴の様に語られる事が多い。

それが現実はどうだろう。国内総生産（GDP）に対する公財政支出学校教育費はOECD加盟30カ国中最下位（文部科学省・教育指標の国際比較16年度版）。あれあれ、もはや教育熱心なんて全然言えないわけである。

少子化自体、あるいは非正規社員化が進む事も世界的にニューエコノミー化が進む中では、日本だけが独自の道を進むことは現実的に難しい。また高齢者医療の増大も対処の難しい問題であろう。しかしこと教育に関しては、我々がもし変えようと思えば変える事が出来る事なのである。要するに、「教育に対してもっと本気で取り組もう」と。

市場原理主義者は、教育も自由競争化を進めれば活性化すると言うかもしれない。教育も持てる者がその師弟に対し手厚く行えば良い、というかも知れない。しかしそれでは発展途上国と同じである。富が偏在化し、それに伴って教育も偏在化することを是とするのであれば、日本の将来は相当暗い。皆さんにも是非とも考えて欲しい。心からそう思う



# 新校舎レポート

2005年11月19日、第8回 芝浦工業大学建築会 総会・懇親会にあわせて、豊洲新キャンパスの見学会が行われました。設計を担当した日建設計の木村雅一氏（1982年卒業）、清田文弘（1989年卒業）にご案内いただき、総勢約百名のOBが、生まれ変わった校舎に驚嘆の声をあげていました。ガラス張りのエントランスアトリウム、運河の風景が広がる図書館、広く充実した製図室など、見所満載のキャンパスは、芝浦工業大学の益々の発展を感じさせてくれます。

見学会終了後、晴海トリトンスクエア内のカフェレストラン「バサラ」にて総会が開催されました。こちらは大盛況で、4年後の再会を約束し、帰路に着きました。



ガラス張りのアトリウム



新キャンパス全景



道路側外観



アトリウムのエスカレータ



食堂



図書館



総会・懇親会



# 新校舎に移って 角田麻夫

学部から修士へと3年間の田町校舎での大学生活から一転、最後の学生生活を豊洲校舎で過ごすこととなりました。私にとっては、在学当初とても大学とは思えない様相を見せていた田町校舎も、長年使用していると、狭いながらも周辺のご飯屋や、金物屋、飲み屋等を利用しながらの生活はかけがえのない思い出となりました。街路をまたぐように配置された校舎も、田町という周辺の街並と一体となったキャンパスであったと考えるならば、芝浦校舎独特の大変良い部分を持っていたのではないかと、今さらながら考えてしまいます。

豊洲校舎では、田町校舎でなれ親しんでいた建築学科特有の製図室も一変し、研究室から見える景色もがらりと変わってしまいました。古い図面や、模型材料が散在していた田町校舎の製図室から、天井も高く、広くなった部屋は、絨毯敷きの綺麗な空間へと変わり、今までの製図室や大学院室の雰囲気とは対比的な印象を受けました。新校舎7階と8階に振り分けられた研究室は、それぞれ豊洲運河とIHビルへと続く前庭からの眺望が広がり、密度感のある田町校舎研究室の眺めから、遠景まで続く眺めへと変貌し、最近では取り壊される工場と続々と完成する高層マンションやショッピングモールの建設風景が印象的です。



慣れない豊洲校舎に移って約半年が過ぎましたが、がらんどろだった製図室にも徐々に学部生、院生のスタディ模型が置かれたり、作品パネルなどが貼り出されるようになりやっと田町校舎から培ってきた建築学科独特の空間になってきたような気がします。夜、豊洲駅から校舎に向かい製図室や建築学科研究室の電気だけがついているという状況を見ると、田町校舎を思い出しうれしくなったりもします。私はあと半年ほどで豊洲校舎を後にしますが、製図室で課題設計に一所懸命取り組んでいる学部生の姿を見ると、校舎は変わっても、建築学生の姿はそう簡単に変わらないものなのだと感じました。今後も学生がどんどん活用し味のある製図室にしていって欲しいと思います。（芝浦工業大学大学院修士2年）



## 「生きがい」 村上健

建築設計監理の仕事をして5年前にリタイア。我が家に居場所のないことを痛感。やることのない辛さ。このままではだめになる。何かやらねば。姪の購入したマンションの内覧会での検査で、あまりにも出来が悪く売主や施工者があまりにも無責任なのに怒りを感じた。

そうだ、マンション購入者のために内覧会での検査をやってあげよう。全く新しいことを探すのではなく、40年間の経験を生かす。これなら楽に出来るだろう。宣伝はどうする？ ホームページ(電子チラシ)をちょこちょこっと作った。途端に依頼のメールが。毎日内覧会検査を続けながら考えた。この体験を依頼主(買主)と私だけのものにしておくのはもったいない。そうだインターネットで公表しよう。

早速メールマガジンをつくり検査レポートを書く。その読者から依頼が入る。たくさんの検査とレポートを続けているうちに、「AERA」が特集記事を組んで、私の仕事を紹介してくれた。その読者から検査依頼や相談のメールが殺到。関西からも依頼が。距離は問わない。問題は依頼主に買主としてのしっかりした当事者意識があるか否かだ。気合の感じられない人はお断り。うまくいくはずないから。こちらは半ばボランティア精神でやっているのだから、自分の主義主張を通させていただく。

内覧会検査では遅すぎる。もっと遡って施工中の現場検査やマンションを選ぶ段階でのアドバイスを始める。メルマガは週刊で出しているが、書き始めるとどうしても膨大なレポートになってしまい、検査の数に追いつかず2年遅れの発行となってしまった。

もっとタイムリーに出せないか？ ブログなるものがあるらしい。インターネットの日記、これやってみるか。簡単に出来た。毎日夕方疲れて帰ってきてビールを飲む前に書いて配信。実にタイムリーだ。一日で数百人が読んでいることを知る。これは影響力が大きすぎる。間違いや問題を起こさないように慎重さが必要だ。ついつい時間がかかる。ビールが飲めない。

メルマガやブログを読んで、朝日新聞が特集記事で私の主張している「売主の責任」というテーマで紹介してくれた。自分のメルマガやブログの影響力はせいぜい数百人の読者だが、新聞記事ともなると桁外れの影響力があり、自分の主張が大勢の人に伝わる。こんな嬉しいことはない。

永年続いたマンション業界の悪い体質で購入者が酷い目に合わされている。これを改善してゆかねばならない。依頼主から信頼され喜んでもらえて生きがいを感じる。現役時代よりも忙しくなってしまった。毎日コツコツと、少しでも長く続け 社会のお役に立ちたい。それが生きがい。弁慶ではないが1000本を目指す。

(1963年卒)





# デザインということ

岩村拓朗

## 芝浦工業大学 建築学会 会報 第22号

卒業してから23年になる。その間大学とはご無沙汰ばかりで、今回の原稿依頼が舞い込んできてびっくりした。

さて、建築学会の会報に乗せるというのに、私は現在建築の仕事をしていない。何を間違ったのか今は住宅メーカーのシステム部門でCADの開発なんぞを行っている。こんな者の駄文を寄稿しても良いものなのかどうか迷ったが、お城の研究会の後輩からの依頼とあれば断るわけにはいかないのだった。就職して23年の間に設計や、品質管理（ISO事務局）、システム開発など色々な事をやってきたが、「やはりデザインはつくづく重要だ」と今更ながらに考えている。

デザインは何も「もの」を作るときだけにあるのではなく、業務や情報システムなど人が関わる物事には全てに当てはまる行為だ。

特に情報システムの仕事は最初の企画から始まり、要望抽出、基本設計、詳細設計、製造（プログラミング）、検査、納品と流れていく。そう、建築とそっくりの流れになっている。だが、「デザイナー（設計者）」と呼ばれる人はほとんど居ないから、こちらが「最初の設計が重要。デザインが重要だよ。」といってもなかなか分かってもらえない。

もっとびっくりするのは「設計のアウトプット（建築で言うと図面や仕様書）」の標準形式が無かったりする。

そんな状態だと、納品されるまで、どんな物が出来るのか誰も分からない。当然品質はボロボロだ。でも設計が不明確だから、正解が分からないという涙ぐましくも香ばしい世界に翻弄されるといふ具合になっている。要は業務のデザインが出来ていないのだ。

ここで、ちょっと仕事のやり方を変える（デザインする）と途端にビフォーアフター的な効果が出てくるから不思議なものだ。設計工程に時間配分を多くして、仕様書の標準フォーマットを決め、レビューを行う。それだけで、どんなシステムが出来るのか事前に分かってみんな安心、品質も改善して無駄な仕事をしなくてハッピーという状況になる。

そう、良いデザインは人を幸せにしてくれるのだ。

（1983年卒 ミサワホーム株式会社）

発行  
東京都江東区豊洲3-7-5  
芝浦工業大学建築会



## 発掘現場にて 金丸義一

大学を卒業して早38年が過ぎ、還暦を越える年になった。建築科を卒業したが、半分以上は考古学・発掘調査とのつき合いであったように思う。二足のわらじを履くようになったきっかけは学生時代中尊寺の発掘調査に参加したことに始まる。以来中尊寺を始め毛越寺や観自在王院などの発掘調査や遺構の確認調査などを行ってきた。各地で調査に携わり考古学関係者とのつき合いも増えてきた。ある現場であった調査員は「建築の人だったんですか、てっきり考古の人と思ってました」と言われたこともあった。

最近、会員である岩手考古学会（岩手県の発掘調査に携わる人たち）の「発掘調査の標準に関する検討委員会」の一員として過去の調査報告書の再検討を行なう機会に恵まれた。多くは他人の報告書であるが、問題点の整理をする中で、「実際自分は正しい調査をしてきたのか」「作業員に的確な指示をしてきたのか」など、自身の過去を反省するよい機会であったと思う。

今は、鎌倉市シルバー人材センターに登録して発掘調査の作業員をしている。作業員を使う立場から使われる立場に。立場が変わっても常に現場にいたいと思うからである。今年には年頭の雪の中での調査から猛暑の深いトレンチの中、秋の長雨にたたられた水浸しのトレンチで過ごしている。

平泉との関わりは前に書いたが、現在は町内に残る石碑を含めた石造物の悉皆調査を町内の有志の方々と数年続け年4～5回かよっている。

我々が相手にする石造物の多くは江戸時代中期以降のものであるが、これまた現在の平泉の歴史の一端を担いその頃の平泉の文化や、地域組織などを鮮明に浮かび上がらせると考えている。出羽三山参詣成就の石碑の下に講中として多くの名が刻み込まれているのを見ると、確かにここに生きていた人がいたのだと思わずにはいられない。

町内をくまなく歩き、一つ一つ実測し銘文を読み、写真や拓本を取る。手間ひまかけて歩けば時には思い掛けない古い時代のものや、町内で唯一のものにも遭遇する。眼がきらりと光る瞬間である。

そのような石造物に逢えることを期待して。

(1968年卒)





# 設計を自分の仕事としたいと思う方へ 吉浦一郎

私は昭和63年卒業の吉浦一郎と申します。月日が経つのは早いもので大学を卒業して15年以上がたちましたがつい先日大学を卒業したような気がします。

建設会社に就職し設計部に配属され10年以上も建築設計の仕事に従事してきました。一通りの建物を設計するための手順も覚え成功・失敗も経験し最近はある程度まとまった仕事でも中心になってまとめていく立場になってきたと感じています。

そんな私が最近おもっていることは「建築家の職能」という言葉の意味です。ゼネコンの設計部に所属している私にとって「全面的に建物の設計をお任せします」というケースはまずなく、顧客との打合せの中で自分の設計的な考えを顧客の理解と同意を得ながら具現化していくことが私の設計の仕事となっています。いろいろな案を練り顧客にプレゼンし案の中に私の考えを盛り込むものの最終的にどの案を選ぶかを判断するのは顧客であることを考えると「建物をつくる主体は誰か」といえば決して私ではなく顧客側に主体があると言わざるを得ません。学生のころに教わった「建築家の職能」では建築家には主体性があるように漠然と感じましたが私の仕事のやり方がまずいのか主体は顧客側にあり設計という仕事の魅力とは何なのかと思うこともあります。

そんな中で手ごたえとして感じるのは建物が竣工するときの楽しみです。自分の主張が通らなかった部分があったとしても建物全体として「私がまとめた仕事」という実感がある建物には愛着が湧きます。この文章を書くにあたり私は何を目指して設計をしてきたかと自分自身を見つめ直すと「いかに自分の主張を盛り込んでいくために努力し続けたか」である気がします。

建築会報を読まれる方の中には将来、建築設計を仕事としてがんばっていきたいと考えている学生の方もいると思いますが、そんな方々に私の経験からのアドバイスは「自分の主張を通すために努力し続けること」も設計のひとつであることです。

当たり前のことではありますが経験を通じて実感することを書かせて頂きました。

(1988年卒 大林組九州支店建築設計部)

# 影のデザイン

佐田野剛

水平材と垂直材のみフレームでデザインしたコーヒータブルが、ある瞬間思いもよらない錯綜とした影を創り出しているのをみてはっとしたことがある。物体としての性質がなく、シルエットのみが創りだすえも言われぬ造形。ある物体をデザインするとき、自然光の影響からは逃れられないと強く感じた。

機能性やプロポーション、構造：設備的合理性といった様々な事象を図面で検証しながら建築を創ろうとはしているが、最終的に物体になってたち現れたとき、それ以外に予期しない側面から影響を与えるものによって建築の印象が形創られてしまう。このような体験を繰り返すうち『影』をデザインすることの重要性について考えるようになった。

フレームによって創りだされる影、巨大な壁面によって創りだされる影、透過度の違いと光の入射角の微妙な違いが視覚的には大きな差異を生み出し、コントラストの溢れる豊かな空間を創りだす。このような『光の影』だけではなく考慮すべき影はほかにも多く存在する。自然の風を制御しながら取り入れ、内外の空間を呼吸する『風の影』、溢れかえる情報から逃れ、自らの思考を行うための『情報の影』、都会の暗騒音から逃れ静かに憩える『音の影』、携帯電話の追撃から逃れ自らスケジュールを構築する『携帯の影』はいかにしてデザインされるべきなのか。

光の強さによって連続的に変化する影は、閉じるか開くかという断続的なファクターではない。建築はもはや閉ざされた砦として存在することは不可能であると思う、壁によって閉ざされた場所ではなく、緩やかに開かれた安心できる『影』を創りだすことなのではないだろうか。

もう一度『陰影礼賛』でも読み直してみようか。

(1988年卒 竹中工務店)



# 「地球の裏側での建築」

小林良治

## 芝浦工業大学 建築学会 会報 第22号

日本から飛行機を乗り継ぐ事30時間、やっと目的地である建設現場に到着した。そこはアフリカの南東部に位置する「マラウイ共和国」という国。日本のODAの一環としてマラウイ共和国に大学と中学校を建設するプロジェクトがあり、そのプロジェクトの設計を担当し、現場監理が始まった為、現地赶赴することになった。

マラウイという国は世界でも最貧国にあたり、一人あたりのGNPは170ドルと低く、世界でもっともHIV感染者が多い国です。そんな国ではもちろん日本食なんて皆無であり、日本食を2年間も食べなかったのは、一生でこれっきりだと思う。

こんな状況で建設現場では、何もかもが日本と違う状況であり、現場では、日本では考えられないような出来事が毎日起こり大変であった。特に大変だった事は、現地の作業員や現場主任者が図面を理解することが出来ないことだ。その為、図面を書いても理解してもらえない為、実際のモックアップを作成し説明する方法が一番良かった。しかし、このモックアップを作成するのは私自身であり、自分で重機を操り、溶接を行い、土までも掘る。こんな毎日が続き、自分で工事までも出来るようになってしまった。

今までは、自分で作ることは考えずに、職人さんなどに頼っていた部分が大きかった。しかし、自分で作ってみて感じたのは、細かいディテールよりも、その時代やその場所で可能な技術力を活かしたデザインとすることだと思った。それには、今後のメンテナンスや利用する人々の為でもあり、また、私自身は再度この地に戻って行くことができない為、基本的にはメンテナンスフリーの建築にする必要があった。結果的には、日本の技術力を活かした現地になじんだ建築が出来たと感じている。

現場が終わり、日本に帰国してから半年が過ぎました。当初日本のセカセカした時間の過ぎ方になれない部分もありましたが、やっと日本での生活に戻れた感じです。

(1993年卒 久米設計)





## 転機 丸尾(旧姓:西田)小真希

『線一本まっすぐひけないのか!』

去年の7月に結婚を機に卒業後約7年程勤めたハウスメーカーを退職し、住宅設計事務所に転職をしてもうすぐ1年半。

同じ住宅の世界とはいえ、今まではひたすら机に向かい積算や利益管理・設計管理をしていた自分にとっては、右も左もわからぬ世界に入り込み、毎日が失敗の連続です。

卒業後、住宅の設計を希望しハウスメーカーに就職したものの、自分の思い描いていた仕事と現実とのギャップにかなり衝撃をうけながらも、目の前の仕事をこなして行く事に必死で、長いスパンで自分の将来を考えていませんでした。

そして、生活の変化を機に自分の10年後20年後を想像してみた時、もっと家創りに携わっていたい!と思い、設計事務所への転職を決めました。

覚悟はしていたものの、事務所は予想以上に体力勝負な所ではありますが、打合せをしながら図面を引き、現場を確認し、必要であればショールームに足を運ぶ…。まだまだ一人前には程遠いながらも、今まで自分のやりたかった事に少しずつ近づけている気がして、帰る時には毎日充実感に満ちています。

実家でぬくぬくとしていた自分が、結婚・転職と環境が変わり、生活の変化に対応するには思った以上に時間がかかりましたが、今こうしてみても思うことは、女性はこの先も出産子育てなど、色々な転機が訪れ、状況も変化し、仕事のペースがその都度変わってくるのだろうなという事です。それでも『家創り』という仕事を続けていく中で、この時間・仕事・日々の生活全てが、将来の自分の糧になっていくだろうと思うと、慣れない家事でさえ新鮮な気持ちでやっていけます。

自分の設計した家が地図に残ることを夢見て、この先もマイペースに頑張っていこうと思う今日この頃です。

こんなに夢中になれる仕事に出会えた事に感謝。

(1998年卒 三井ホームデザイン研究所)

「社会に出たら、建築も、建築工学も、環境システム学科も関係ない。みんな芝浦の卒業生なんだ。」

去年大学を退官なされた三井所清典教授の言葉を聞いたのは、大学三年生を終えようとしていた2005年2月の第一回アーキフェスタのことでした。アーキフェスタは芝浦工業大学建築系の3学科（建築学科、建築工学科、環境システム学科）の連合卒業制作展であり、このときが初めての試みでした。同じ芝浦の名の下に、三つも建築系の学科があって、まったく異なった建築のあり方に価値を置き、作品性が学科ごとにまるで違います。一年後に卒業設計を控えてた僕にとって、先輩方から頂いた貴重な体験でした。

「連合展を継承していきたい」と熱くなり、第二回アーキフェスタの建築学科代表を務めさせていただきました。

第二回アーキフェスタは2006年2月24・25・26日に最後の田町校舎の体育館で行いました。今回の会の特徴として、大きく二つあったと思います。

一つ目は、資金の問題でした。前回は特定の学科の予算からの出資に頼るところが大きかったです。しかし今回は、大学の



発行  
東京都江東区豊洲3-7-5  
芝浦工業大学建築会



# ARCHIFESTA - 2 原嶋宏樹

アクティブプラン援助金制度へ申請し、資金を得ることができました。各学科からの均等出資も検討しましたが、学科を越えた活動であり、予算を大学から得ることで、学科を意識せずに学生自身が本当にやりたい展示会を企画することができる道をつくりました。

二つ目は、前回のアーキフェスタは各学科の教授の方々に来ていただきましたが、今回はそれに加え、卒業生の方々にも御講評いただく日を設けました。各学科の卒業生団体である建築会・建友会・円座・建築研究会に声をおかけして、多くの卒業生の方々に三学科の作品を見ていただきました。

今年のテーマは学科の壁を越えて「とことん繋がる」ことでした。まずは僕ら自身がアーキフェスタの計画の一年間を通して、活動やイベント等の情報交換を行いました。展示会においては、僕らの卒業設計を通して先輩方・各学科の教授の方々・後輩を繋げる機会としました。また雑誌やHP等によって広報活動を行い、他大学の学生や出展者のご家族など多方面からご来場いただきました。このように各世代が集まり協力しあうことで、「芝浦の建築」を広く紹介し、情報を発信することができます。毎年繰り返される小さな繋がりがやがて大きな輪へと成長していくことを期待しています。  
(1996年卒KAJIMA DESIGN)



最優秀賞「空間深化・浸化」原嶋宏樹



審査の様子



# 建築学科の動きと近況

建築学科 林 正司

毎年建築会のご支援をいただき実施している行事を含み学科の近況をお知らせ致します。

まず、今年3月で、三井所、清田、塘の3先生が定年退職されました。いずれの先生も長い間建築学科のために尽くして頂き、学科一同感謝致しております。

今年も3月に新しい社会人107名が建築学科より巣立ってゆきました。3月18日に、東京フォーラムでの大学全体の卒業式の後、都内のホテルにて学科としての学位授与、成績優秀者の表所が行われ、建築会賞として贈られる成績最優秀賞が、原嶋宏樹君に石井建築会長より手渡されました。また彼は卒業設計最優秀賞である三浦賞も同時に受賞しました。

学科単位の卒業式を始めたのは建築学科が最初で、整った環境で学科として卒業を祝してあげよう、という考えから学位紀授与とパーティを本学科が始めましたが、現在ではほとんどの学科が実行しています。

本学科が主催し、建築会から後援をいただいているデザインチャンピオンシップも本年で5回目となり、毎年著名な建築家に出題と審査員を依頼しており、本年はシーラカンスの小嶋一浩氏が「新校舎にFLAをインプットせよ」という課題を出されました。11月の豊洲での学園祭中に公開で審査が行われ、チャンピオンには建築会から賞品が贈られます。是非新しい校舎で学生の活力をご覧ください。

就職進学状況については、今年も建築会のご協力を頂き、諸先輩に来校して頂き、学生に種々の職種や大人の社会の魅力と厳しさを語り、強い刺激を学生にもたらして頂いております。それが功を奏してか、学生の就職は景気の回復をも反映して今年はより順調であり、また大学院の進学も建築学科特有の他大学受験者が多い傾向に変化はなく、いずれも順調に推移しております。

4月に豊洲キャンパスの新しい校舎に全面的に移転いたしました。新しい建物はやはり気持ちが良いものです。研究室や製図室・実験室ともに田町より広くなり、教育・研究環境は大幅に改善されました。もう一つの移転の効果は「果たして建築はこれでよいのか」という素朴な疑問を我々にもたらしたことです。ゆとりのある空間はすばらしいものですが、財源・空間の大きさに限りがあるときに、建設・維持コストを考えると、教育・研究に最も重点を置くという大学として基本的な考え方、意気込みと、建物・空間のデザインが一致しているのか疑問を感じないわけではありません。自分の大学の建物に実際に入ってみると、建築のデザインは形だけでなく施主の考え方を現してしまうものであることを体感させられ、建築教育の難しさ・大切さを改めて考えさせられます。

# 建築学科特別講演会報告

特別講演会担当 常任幹事  
井家常雄・染谷清

一昨年より行ってまいりました建築学科特別講演会もすでに6回、計18名の卒業生の方々のご協力を得て目標通り開催する事ができました。第3回より第6回の報告をいたします。

第3回10月20日、ハウスメーカー・三井ホームの河合誠氏(1971卒)に 2x4の住宅の日本仕様の開発等について、総合建設業・西松建設の千葉実氏(1985卒)に六本木再開発ビルの施工に従事した経験を、大手設計事務所・佐藤総合計画の安藤暁子さん(旧姓有島・1995卒)には、神奈川県立美術館葉山の設計、現場監理を通しての経験を女性の立場で話していただきました。女性の講師としては木村ひろ子さんに続いて二人目となります。

第4回11月17日、建築事務所・曾根幸一環境設研究所の西海哲哉氏(1991卒)に地域の再開発計画から住宅設計までの広範囲な設計業務を、総合建設業・P S三菱建設の中瀬博一氏(1993卒)にP Sコンクリートの開発研究及び施工の話を、ディベロッパー・S D建築企画研究所の清水修司氏(1969卒)には大規模マンション開発を通して総合建築計画の話を、尚、清水氏は昨年秋黄綬褒章を受賞されました。(建築会のホームページをご覧ください)

第5回12月15日、アトリエ設計事務所・納谷設計事務所の納谷学氏(1985卒)に住宅建築を中心とした設計監理の話を、(多くの作品が建築雑誌に発表されています)大手設計事務所・山下設計の海老原悟氏(1986卒)に公共 建築等大規模な設計及び現場監理の大変さを、建築設備業・T O T Oの山崎哲二氏(1992卒)にはタイルの研究開発と施工の話をそれぞれしていただきました。

第6回18年1月19日、特殊建築金属製作・菊川工業の花岡捷彦氏(1966卒)に特大の鋼製建具及びモニュメントの製作について、専門建設業・高砂熱学工業の小林祐浩氏(1983卒)に建築設備工事やプラント建設等について、又総合建設業・安藤建設の吉越恒善氏(1986卒)に建設工事の現場監督としての作業手配及び工程管理等の話をそれぞれの方々にしていただきました。学生はもとより我々社会人にとりまして大変有意義な講演でした。講師の方々にはお忙しい中、建築学科の学生の為に本当にありがとうございました。尚、今年度も 3回程建築学科の先生方と協力して開催することになっております。建築会のイベント案内に掲載致します。

(井家常雄：1968年卒 株式会社 サンメイエンジニアリング)

(染谷清：1969年卒 有限会社 K A Iプランナー)

## 2007年度会費納入のお願い

会費納入に率は昨年度までと比較し少々改善されてきておりますが、まだまだ低調です。卒業生の増加に伴い発送費も必然的に増えます。ホームページの維持費も必要です。

ぜひ皆様のご協力をお願い致します。同封の郵便振替用紙でご送金下さい。会員番号が封筒の「タックシール」に記述してありますので、郵便振替用紙の会員番号欄にご記入して下さい。住所や勤務先などに変更があった方は通信欄にその旨記入して下さい。名簿のデータを更新します。

個人情報保護法が施行されています。建築会においても、名簿に氏名以外の情報掲載を拒否したい方に対して対処致します。ご希望の方は通信欄にその旨ご記入下さい。

年会費 2,000円

# 編集後記

建築会副会長 松寿 章

## 芝浦工業大学 建築会会報 第22号

会報の発行のための打ち合わせなどで何度か豊洲に来るうちに、帰りにちょっとよった居酒屋の場所も覚えてきて、ようやく田町から移転した実感が沸いてくるようになりました。この会報は豊洲移転以来初めての発行でもあり、新任の先生方をはじめとして多くの方々が移転をきっかけとして、新しい芝浦工大の教育のありようや学生像を模索・試行錯誤している様子などを垣間見ることができます。大きな変化はこの豊洲地区の地価の上昇が数年前の8倍にもなっているということにも現れています。そのよしあしは別にして、大学の移転がこの地区に新しい風を吹かせたといえるでしょう。

いま世界は大きく変化しています。アジアと日本のこと一つをとっても、激動の時代になりました。大学の存続も真剣に考えていく時代になってきているそうです。変化していける大学だけが生き残っていくのかもしれませんが。この会報を読む人が“今大学で何が起きているか”を知り、開かれたイベントに積極的に参加することで、みんなで芝浦工大のこれからを考えていくきっかけになってくれればと思います。

最後に、この会報のためにご寄稿いただいた先生方・OBの方々に感謝します。  
なにかと至らないところが多かったことをこの場を借りてお詫びします。

(1978年卒 松寿設計コンサルティング)

### ps. 建築会サイト管理者より

デジタルデータによる当会報は、印刷物として会員諸氏に送付された「建築会会報 22号」の複製です。海外で生活されている会員達が建築会サイト上で会報を閲覧できるようPDF版を作成したものです。

建築会のサイト管理者として、印刷物としての会報とは異なる情報発信ができないものかと考え、電子会報を作成しています。会員各位からのご意見をお寄せください。

サイト管理者 阿部泰資 (1967年卒 株式会社 ライトプランニング)

芝浦工業大学 建築会 URL <http://sit-arch.com/>

発行  
東京都江東区豊洲3-7-5  
芝浦工業大学建築会